日本・デンマーク外交関係樹立
150周年記念展覧会

日々の生活
―気づきのしるし

Everyday Life – Signs of Awareness

2017年8月5日(土)～
2017年11月5日(日)

展覧会名	日本・デンマーク外交関係樹立150周年記念展覧会　日々の生活 ― 気づきのしるし　Everyday Life ― Signs of Awareness
会　期	2017年8月5日(土)～11月5日(日)　開場時間 / 10:00～18:00 (金・土曜日は20:00まで) 休 場 日 / 毎週月曜日(ただし、8月14日、9月18日、10月9日、10月30日は開場)、9月19日、10月10日
会　場	金沢21世紀美術館　展示室7～12、14、光庭、交流ゾーン　　出展点数　282点
企　画	黒澤浩美(金沢21世紀美術館チーフ・キュレーター)　スィスィーリエ・マンス(デザイナー)
料　金	一般1,000円(800円) / 大学生800円(600円) / 小中高生400円(300円) / 65歳以上の方800円 ※(　)内は団体料金(20名以上)及び前売りチケット料金　※本展観覧券は、「ヨーガン レール　文明の終わり」展との共通券です。 前売りチケット: チケットぴあ TEL 0570-02-9999 (Pコード[本展観覧券] 768-377) ローソンチケット TEL 0570-000-777 (Lコード[本展観覧券] 52171)
主　催	金沢21世紀美術館 [公益財団法人金沢芸術創造財団]
後　援	デンマーク文化省、デンマーク芸術振興財団プロジェクト支援工芸・デザイン委員会、デンマーク王国大使館、北國新聞社
助　成	スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団
国際協力	クヴァドラ、ルイスポールセン、マースクライン、スキャン・グローバル・ロジスティックス、(株)アクタス、日進木工(株)
協　賛	バング＆オルフセン ジャパン、(株)大泉物産、(株)木村硝子店
協　力	(株)福光屋、スカンジナビア航空、(株)日本ハウスホールディングス、(株)アンデルセン、金沢市農林水産局森林再生課、金沢工業大学、ゲール、(株)鹿島出版会、青森市教育委員会、五割一分、(株)LIXIL、(株)良品計画、DUNE、(株)天童木工、(株)山岸製作所
お問合せ	金沢21世紀美術館　TEL076-220-2800

本資料に関するお問合せ

金沢21世紀美術館　事業担当: 黒澤・立松　広報担当: 落合
〒920-8509　金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814　FAX 076-220-2802
http://www.kanazawa21.jp　E-mail: press@kanazawa21.jp

展覧会について

デンマークと日本は、それぞれの歴史や文化を背景に、ときに影響し合いながら発展してきました。特に、機能と実用性に加え、美しい意匠をまとった優れたデザインは、両国の文化的アイデンティティと美意識を示すものとして、極めて高い評価が与えられています。
デンマークは、建築、家具、生活用品をはじめ、福祉、教育、交通網など、国のグランド・デザインも含めた優れたモデルを構築して、屈指のデザイン大国として世界の人々の強い関心を集めてきました。一方の日本は固有の文化・思想に基づき、時代の象徴となるデザインを創造し、小型でシンプルな形を可能にした技術力、素材の特徴を最大限に引き出す伝統の技とその継承によって、デザインの分野でも独自の価値を提案し続けています。本展では、日本とデンマークのデザイナー、建築家、アーティストによる、日常を豊かにする気づきの「現れ」を紹介し、デザインを通して両国の現代の暮らしに見るモノとコトについて考察します。

主な出展作家

ベン アンド セバスチャン
カイ・ボイイスン
ルイーセ・カンベル
ローサ・トルノウ・クラウスン
ナナ・ディツェル
オラファー・エリアソン
セーアン・エングステズ
原研哉
ポウル・ケアホルム
イーレク・マウヌスン
バアウ・モーウンスン
アネ・ファブリーシュス・ムラ
ナガオカケンメイ+D&DEPARTMENT
マグレーデ・オズゴー
呉夏枝
ペアニレ・ポントビダン・ピーダスン
三分一博志
繁富(栗林)香織
スーパーフレックス
鈴木俊治＋金沢工業大学
トラフ建築設計事務所
トーラ・ウーロプ
ヘンリック・ヴィブスコフ
ほか

展覧会の特徴

日本とデンマークの外交関係樹立150年を記念した展覧会

今年は、日本がデンマークと修好通商航海条約を締結した1867年からちょうど150年に当たります。当時の徳川幕府にとっても地球の反対側とも言えるような遠方の国と国交を結んだのは、国際国家としての自立を目指しその承認を獲得するためだったとも言えるでしょう。その後両国は、世界でも歴史の長い皇室・王室を有する国ということもあり、長きにわたり友好関係を育んできました。この節目の年に、日本とデンマークのデザインを掘り下げることで両国の文化やものの考え方、暮らしの在り方を検証する展覧会を開催します。

二つの国のデザインから見えてくるそれぞれの国の文化と歴史、そして暮らし

本展は日本、デンマークの日常使われている優れたデザインの製品を中心に展示します。日本・デンマークという二つの国に生きる人々の暮らしに関わるデザインを観察し、それらがどのように生まれてきたのか両国の文化や思想、歴史的な背景にも言及しながら、未来の可能性を探求するデザインの行方について現代の視点で考察を試みます。

2国二人のキュレーターの作る企画展

この展覧会は、日本とデンマーク2国二人のキュレーターが企画しました。日本側は当館のチーフ・キュレーターの黒澤浩美、そしてデンマーク側のキュレーターはスィスィーリエ・マンスが務めます。マンスは1972年デンマーク生まれ。自身もデザイナーとして「Everything is Possible」という考え方の下、フリッツハンセン社やバング＆オルフセン社などから家具などを多数発表してきました。違う文化と歴史の下にある二人のキュレーターが、それぞれ違うところ優れたところをお互いに開示しながら、デザインを通して歴史を概観し未来につなげる展覧会を作ります。

展示室ごとのキーワードでくくる展示構成

各展示室、各プロジェクトには一つのキーワードが付いています。例えば展示室8には[MATERIALITY]、展示室9は[VOID/AIRY]という具合です。二人のキュレーターが展示を考える上で各自こうしたキーワードを出し合い構成を作り上げました。金沢21世紀美術館の展示室は、広さや天井の高さ、形状などそれぞれ個性が違います。各展示空間を活かした展示とそのキーワードも展覧会の見所です。

レクチャーで知るそれぞれの国のデザインの考え方

今回の展覧会は、展示のみではありません。展覧会をさらに深く知り、作品に込められた思いやアーティストの考えなどをより詳しく理解していただくためにデザイン、教育、医療、都市計画の分野に関わるトーク・シリーズを開催します。デザインはモノに対してのみではありません。様々な分野を軽やかに横断するクリエイターたちの言葉を直接聞くことのできる貴重な機会となるでしょう。具体的には展覧会の初日の8月5日から10月まで6回にわたってトークを開催いたします。

キュレーターからのメッセージ

黒澤浩美（金沢21世紀美術館チーフ・キュレーター）

photo: Ikeda Hiraku

人類は長い歩みの中で、より良く生きるための方法や手段について、常に考え、更新を実践してきました。獲物を捕獲し、土を耕す道具の数々は、そのときの人間の知恵と工夫が「かたち」として現れたものです。有名無名を問わず、今も変わらず愛されているものも多くあることでしょう。そのときどきに持ち得た技術を余すところなくつぎ込んで、人々は日常を豊かに過ごすための努力を惜しまずにきたのです。こうした、生活をもっと良くしたいという思い、また、他にはないことの「気づき」を「かたち」に現すこと。その過程をデザインと呼んでよいとしたら、私たちの日々の暮らしが、デザインによってどれほど活気に満ちた豊かで美しいものになっているか、計り知れません。
デザインは人の好みの問題ではなく、日々の生活にぴったりと合う「かたち」を見いだすために、さまざまな要素の抽出、検証、統合を行うことです。デザイナーやアーティストたちは、知覚しているものを熟考し、良い「かたち」を特徴づける、何らかの方法を見いだす人々です。また、使いやすさや心地よさだけでなく、調和のとれた美しさもまた、彼らの目指すところです。調和とは、そのモノ自体の調和もありますが、そのモノを使う人との調和も考えられるでしょう。
気持ちを満たし、生き生きとした日々の生活を支える力は、細部や個別に宿るだけでなく、全体として機能することによってもたらされます。日本とデンマークのデザインを考えるとき、文化や歴史を踏まえて各々の特徴や違いを指摘することも出来ましょうが、今日においては、協働や連携によって、共に豊かな創造を目指すといったことが重要なのではないか。展覧会を通して、デザインのためのデザインではなく、真に日々の生活を豊かにするデザインに向ける創造者たちのまなざしを感じていただきたいと思います。

スィスィーリエ・マンス（デザイナー）

photo: Cecilie Manz Studio

完璧な日々の生活—それは存在するのでしょうか？
私たちは丹念に日々の生活の精錬、最適化、計画、合理化を追求しています。しかし日々の生活それ自体は、いつも、欠陥、過ち、災難、不規則に邪魔をされ、台無しにされているように思います。

日々の生活は構造やシステム、そしてモノであふれています。私たちの家と精神の場所を占めています。だからこそ、それらは私たちの生活を複雑にするよりも、豊かにする品質と機能性、美的価値を持っているべきなのです。

良いデザイン、良いクラフトは、曲げたスチールの質素な缶切り、美しいアンティークの木の椅子、通りの看板、自転車、新しい素材、アルファベットの文字、驚きで立ち止まらせる瓶、金沢の兼六園で、雪で枝が折れないように枝に張られた綱のことかもしれません。

適切な場所に適切な素材、つまり、適切なモノの実用性がもっとも重要です。それは素材の本質を認識し、どうしたら特性を活かせるか、オープンな心を持つ事を必要とします。細部への注意。デンマークと日本のデザインとクラフトを特徴づける美徳です。

日々の生活は私たちの存在の大部分を作り出しています。だからこそ、私たちができる最高の生活を作ることに専念するのは理にかなっているのです。「日々の生活—気づきのしるし」は私たちの日々の生活に形や定義を与える、デザインやクラフトにおける、モノとその解を選りすぐって紹介します。

展示構成

日本・デンマーク修好通商航海条約レプリカ
レプリカ製作: DNP 大日本印刷株式会社
1867 / 2016
Collection of Royal Danish Embassy, Tokyo
Courtesy of Dai Nippon Printing Co., Ltd.

展示室7前

［はじまりのしるし］

1867年に締結された「日本・デンマーク修好通商航海条約」の日本側原本は、1923年の関東大震災で焼失してしまいました。そこで、DNP 大日本印刷株式会社の協力の下、デンマーク国立公文書館が所蔵するデンマーク側原本の精密なレプリカが製作され、日本に寄贈されました。

原研哉
《無印良品の思想の表象としてのタグシステム》
2017
（展示イメージ）
© Hara Kenya

展示室7

［無印良品］

日本における日々の生活のデザインを振り返るとき、「無印良品」の登場は大きな転換点を示すものと考えられます。
「無印良品」が誕生した1980年代の日本はバブル期にあり、人々の消費活動は潤沢な資金を背景に高価な海外ブランドにも注目が集まっていましたが、「無印良品」を打ち出した良品計画は、モノ自体の魅力を伝え、モノの有用性が生活者に求められることを目指していきました。ブランド（印）が価値判断の基準ではなく、生活の基本を見返して、何が本当に必要なのかを考えることは、21世紀に入ってますます求められる価値観であり、MUJIの姿勢は、時代を先行して今や北米、ヨーロッパ、アジアなどを含めた世界展開を見せています。
今回は無印良品のアドバイザリー・ボードを務める原研哉が、無印良品である理由を示す「タグ」に焦点を当てたプレゼンテーションを行います。

アネ・ファブリーシュス・ムラ
《ストリートプリント》2013
Photo: Mindcraft /Jule Hering

ポウル・ケアホルム
《ドローイング・キャビネット》
ルド・ラスムッセン
1955
Collection of The Royal Danish Academy of Fine Arts - Schools of Architecture, Design and Conservation
Photo: Carl Hansen & Søn

展示室8

［MATERIALITY］

「あるモノが何を素材にしているかはささいなことではない。実際、これはそのモノの本質やアイデンティティを決定づけることもある。」（本展共同キュレーター スィスィーリエ・マンスによるMaterialityに関する解説文より抜粋）
例えばデンマーク家具のデザインのパイオニアとして名高いコーオ・クリントは、デザインは見た目の造形力ではなく、素材と手法を適切に選択した論理の帰結であると考えました。ここでは、素材の本質を理解し、その特徴を活かした真摯な姿勢と、細部にこだわった職人による手仕事など、デンマーク・デザインのハイライトを紹介します。

Photo: Little Sun Foundation

展示室8前

［リトル・サン］

《Little Sun（リトル・サン）》は、2012年にオラファー・エリアソンが開始したエネルギー供給に関わるプロジェクトです。太陽をモチーフにした手のひら大の装置は、裏にソーラーパネルが取り付けられていて、日中に自然エネルギーである太陽の光を蓄電すれば、夜には手元を灯すライトになります。エリアソンは、世界中で電気の供給を得られない人々に《Little Sun》を届けられるよう、デザイン、開発、販売、分配など、持続可能なビジネスモデルを作り活動をしています。社会のために、人々のためにという協働共存の理念は、特別な人たちが特別な機会に行うものではありません。この小さな装置は、エネルギーのについて、日々の生活の中で誰もが考え、行動することを促しているのです。

SUPERFLEX
Installation view:
ARoS - The Future, 2017 (参考画像)
Photo: Anders Sune Berg

光庭2

[REFLECTION]

《投資銀行花鉢(Investment Bank Flowerpots)》シリーズは、世界で最も有力な20の投資銀行によって運営されている本社ビルをモデルにした花鉢の作品です。
それぞれのビルでは、幻覚誘発植物が育てられています。資本主義にけん引される経済至上主義の世の中で、浮かれるような高揚感が植物によってもたらされる幻覚と重なり合い、現代社会の状況を批評しています。

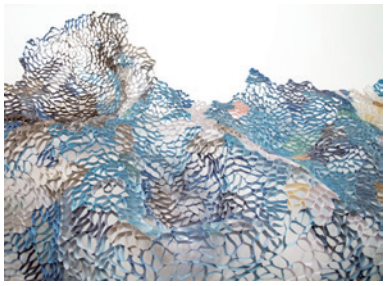
左:
ベン アンド セバスチャン
《Department of Voids(空虚部門)》2017
Photo:Jeppe Gudmundsen

右:
伊藤孚《線／影(丸)》2002
Collection of 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

展示室9

[VOID/AIRY(無 / 有)]

benandsebastian(ベン アンド セバスチャン)は、デザインミュージアム・デンマークの所蔵品の中に、ケースのようなモノを見つけました。由来も機能もわからないまま、捨てずにミュージアムに置かれるモノの存在に好奇心をかき立てられ、そのモノが何かについての物語を紡いでいく作品を発表します。伊藤孚(Ito Makoto)による平面作品は、ガラスの特性を生かして、立体的なかたちを浮き上がらせています。モノが存在する、あるいは存在しない、とは、どこに境目を見つければ良いのか。2組の作家による作品を通して考察します。



ルイーセ・カンベル《思い出す》2017
©Louise Campbell

呉夏枝《10289》2012
Courtesy of Aomori City Board of Education
©Oh Haji

展示室10

[TIME]

特に都市に暮らす人々は、あらゆるものがスピードを上げて流れていくことに戸惑いや不安を感じることがあるでしょう。時間に流されていくことで見失うものへの恐れや危惧を振りほどくかのように、Louise Campbell(ルイーセ・カンベル)は、紙の輪を延々とつないだ有機的な造形作品に取り組みました。空間に広がるボリュームそのものが、彼女が手をかけた時間の変換ともいえます。
呉夏枝(Oh Haji)は、織や染の技法で布を素材に作品を手がけてきた作家です。今回は青森県津軽地方の「こぎん刺し」の着物を調べ、一針ひと針に思いを寄せた昭和初期の着物を展示し、模様の美しさだけでなく、日々の生活に息づく手作業の重みを、写真作品として発表します。

《HOME》(展示イメージ)
© Hara Kenya

展示室11

[HOME]

「家」についての考察は、現代社会を考える上で示唆に富んでいます。どのようなモノに囲まれて暮らしているかは、そこに暮らす人々の選択によるのです。本展キュレーターの一人、スィスィーリエ・マンスがデンマークの製品を、デザイナーの原研哉が日本の製品をピックアップして、両国のデザインの粋が融合した「家」を作り出します。家にある基本的な構成要素であるモノから文化の違いが浮き彫りになるかもしれませんし、グローバル化によって、ますます融合著しい家の姿が現れるかもしれません。

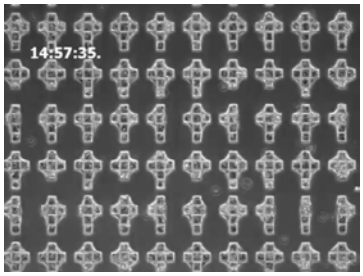
キュレーター: スィスィーリエ・マンス+原研哉

「Your Memory」2017
（参考画像）

展示室11前

[MEMORY]

棚に置かれた品々には、そのモノにまつわる持ち主からメッセージが書かれたタグが付いています。あなたがそのメッセージとモノを持ち帰りたいと思ったら、自分の思い出をタグに書き込んで自分の持ち物と交換していくことができます。世の中にあふれるモノは、思い出や記憶と結びつくことで、この世に一つだけの特別なモノになります。それはブランドやデザイナーの名前にかかわらず、他の何にも代えがたい、大切な思い出と共にあるものです。

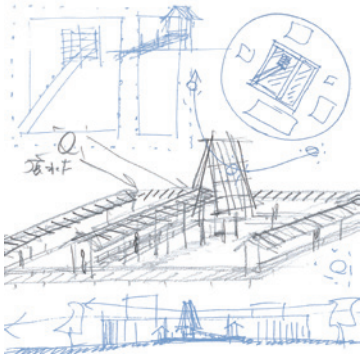


繁富（栗林）香織
《細胞で折り紙！平面から立体へ》2012
© Kuribayashi-Shigetomi Kaori
Courtesy of Hokkaido University

展示室12

[2D→3D（2次元から3次元へ）]

自然界の生物や植物は、環境への適応の過程で、最適なかたちを得て進化してきたと考えられます。繁富（栗林）香織は、伝統的な折り紙の技法に着想を得て、血管を補修するステントグラフト（金属製人工血管）の研究に応用しています。折り紙から生まれる技術革新は、それまで成し得なかったことへの道を開くものとして高い関心を集めています。

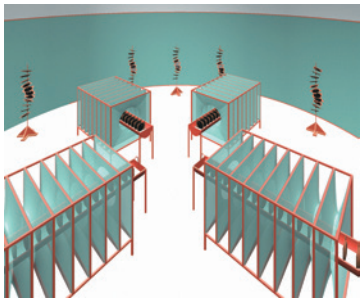


三分一博志《風、水、太陽の社》2017
金沢21世紀美術館インスタレーションのためのスケッチ
©Sambuichi Hiroshi

光庭3

[HUT FOR SUN, WATER AND AIR（風、水、太陽の社（やしろ））]

デンマークは再生可能エネルギーを使ったグランドデザインで高く評価されている国です。元々、豊かな自然と深く結びついた日本とデンマークに暮らす人々は、季節の変化を感じ、折々の楽しみ方を自然の中に見つけてきたものです。
三分一博志は、太陽の動きによって生まれる温度差によって、空気が移動する感覚を得る、環境を読む社を作りました。「風、水、太陽」という、自然に動く素材で作られた建築は、ガラスとコンクリートの無機的な環境と共に美しい調和をもたらします。

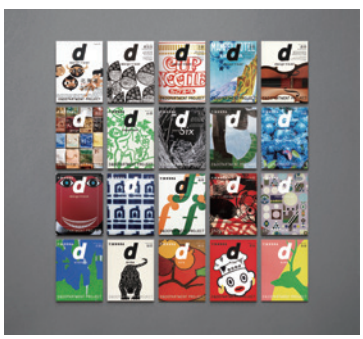


ヘンリック・ヴィブスコフ
《The Repetitive Clean（繰り返し洗う）》
2017（展示イメージ）
©Henrik Vibskov

展示室14

[ROUTINE（繰り返しすること）]

Henrik Vibskov（ヘンリック・ヴィブスコフ）は、ファッションデザイナーとの肩書を持ちますが、コレクションのショーは、モデルが身につける衣服そのものが重要というより、彼の世界観を表すさまざまなアイテムが統合された、一つのパフォーマンス作品として見た方が、しっくりきます。本展では、「皿洗い」をテーマに、毎日のように繰り返される決まった動作について、うんざりするほどの数が積まれた皿と流し台の前に立つよう促されます。生活とは、パーフェクト（完全）に美しく楽しいことばかりでなく、汚れや腐敗も忘れてはいけないというわけです。



ナガオカケンメイ＋D&DEPARTMENT
《d design travel》2009 -
©D&DEPARTMENT

展示室14周囲

[IDENTITY（アイデンティティ）]

ナガオカケンメイは、デザイン活動家として地域に根差したモノづくりの中から、ロングライフデザイン（長く人々に使われてきたその土地らしいデザイン）の道の駅「D&DEPARTMENT」を47都道府県に一つずつ作っています。地域に暮らす人々と対話し、良さや「らしさ」を発見して整理、提案、運用を行うプロジェクトを展開している中の一つに、「d design travel」があります。日本の国土は世界地図の中では小さな国として自ら認めるところですが、その多様さを眺めるとき、日本人の我々も、その土地ならではの風景に驚くのではないでしょうか。

ニューハウン、コペンハーゲン、2007
Photo: Gehl

交流ゾーン1

[PUBLIC LIFE(パブリックライフ)]

デンマークは歩行または自転車での移動が楽しい国です。公共空間のさまざまな条件と人々の活動の関係を明らかにして、魅力的なまちづくりに生かしてきた歴史があります。都市空間は、機能的でありさえすれば、また使用の頻度が高ければ人々は心地よいコミュニティーを形成できているかといえば、そうでは無いのではないか。空間を利用する人々の「観察」「計測」「分析」「実践」を研究している建築家ヤン・ゲールのパブリックライフ学に学び、金沢においても街に生き生きとした空間はないか、調査をした、「パブリックライフ学 in 金沢」を紹介します。 監修:鈴木俊治

バアウ・モーウンスン《J39》
フレデリシア・ファニチャー、1947
Photo: Fredericia Furniture

交流ゾーン2-1

[CHAIR PARADE(チェア・パレード)]

デンマークと日本から、30脚の椅子が並びます。いくつか試して座りながら、ゆっくり過ごしていただけます。座り心地もさることながら、細部にわたるまで注意が行き届いた、デザイナーや職人の仕事を間近で見て、お気に入りの1点を見つけていただければ幸いです。

セーアン・エングステズ
《Levitation(空中浮揚)》2010
©Søren Engsted

交流ゾーン2-2

[ANOTHER CHAIR(もうひとつの椅子)]

Søren Engsted(セーアン・エングステズ)は洞察力のあるユーモアを使って芸術活動を実践し、アートの歴史的な現場で彫刻に対するテーマを追求しています。特に映画とパフォーマンスの分野において、普段の物理的な環境と日常的に目にするモノとを切り離し、テキストとサウンドを用いて物語を展開していきます。《Levitation》(2010)はエングステズがインド製の"目に見えない"椅子に足を組んで座り、スクリーンの中央に位置して、観客に広範囲にわたるテーマ―例えば、人類の飛行からバレエダンス、地上視界から重力の欠如―に関する多くの逸話を語るレクチャーの映像作品です。

ローサ・トルノウ・クラウスン
《Can a Room Be a Loom ?》
2014 (参考画像)
©Rosa Tolnov Clausen

交流ゾーン3

[WEAVING(織ること)]

Rosa Tolnov Clausen(ローサ・トルノウ・クラウスン)は、細い布を使って手織りする「織物キオスク」のワークショップを開催します。会話と手作業は、どの国においても見られるものですが、模様や素材の違いはコミュニティーのもう一つのプロフィールでもあります。来館者が期間中に彼女のキオスクを訪れて、布の由来や織りの手法などを話し合い、協働でデザインについても考え、一つの織物を作り上げる予定です。

期間限定 10月12日(木)～15日(日)

関連プログラム

TALK SERIES VOL. 1 – 6

展覧会をより詳しく理解していただくためにデザイン、教育、医療、都市計画の分野に関わるトーク・シリーズを開催します。
[会場] 金沢21世紀美術館 レクチャーホール　[定員] 先着80 名(予約不要)　[料金] 無料
※進行の都合のため途中退場はご遠慮ください。

VOL. 1
原研哉(日本デザインセンター代表)「辺境の洗練－日本の簡素とデンマークの簡潔」
日時:8月5日(土) 10:30～12:00(開場10:15)

VOL. 2
ルイーセ・カンベル(デザイナー)「自分のペースを探して－走る人々の時代に歩く人であることの挑戦」
日時:8月5日(土) 13:30～15:00(開場13:00)　※逐次通訳付(英-日)

VOL. 3
繁富(栗林)香織(北海道大学新渡戸スクール)「細胞を折る？－折り紙の折り畳み技術の医療への応用－」
日時:9月15日(金) 18:30～20:00(開場 18:00)

VOL. 4
大本綾(株式会社レア、クリエイティブ・プロセス・デザイナー)「デンマークと日本のデザイン教育の未来」
日時:9月16日(土) 13:00～14:30(開場 12:30)

VOL. 5
クレスチャン・ホルムステズ・オーレスン(デザインミュージアム・デンマーク、展覧会・収蔵部 部長)
「デンマークのデザイン－インターナショナルな表現」
日時:9月22日(金) 18:30～20:00(開場 18:00)　※逐次通訳付(英-日)

VOL. 6
デヴィッド・シム(ゲール、クリエイティブ・ディレクター)「人々のための街をつくる」
日時:10月6日(金) 18:30～20:00(開場 18:00)　※逐次通訳付(英-日)

EVENTS IN OCTOBER　VOL. 1 – 2

VOL. 1
ヘンリック・ヴィブスコフ(アーティスト)
日時:10月9日(月・祝)

VOL. 2
ローサ・トルノウ・クラウスン(アーティスト)
日時:10月12日(木)～15日(日)

※詳細は9月中旬にWebサイトで発表します。

関連プロジェクト

ポタリング・クラブ

「ポタリング＝Potter+ing=自転車で気ままな散歩」
美術館の敷地内でデンマークの自転車を試乗体験できる、ポタリング・クラブの運営メンバーを募集し、会期中来館者が自転車に乗れる機会を設けます。
[期間] 2017年8月5日(土)～11月5日(日)休館日を除く
運行時間不定期
[会場] 金沢21世紀美術館プロジェクト工房前にて受付

ベリカン デザイン《ラボ・チャリオット》ラボ、1976
© Rabo Tricycles A/S　Photo: Rabo Tricycles A/S

デンマーク・クラブ

「デンマーク」をキーワードに企画を立て実施する市民参画プロジェクトです。日々の生活展の展示解説ガイドやイベントのサポートなど、展覧会運営のメンバーを募集します。
[期間] 2017年8月5日(土)～11月5日(日)随時(休館日を除く)
[会場] 金沢21世紀美術館「日々の生活」展示エリア

Your Memory

展示を通してものと人々の関わりそのものと自分との関係を考えるプロジェクト。来館者が、展示室11前のカウンターでその品物にまつわる簡単なエピソードと自分の名前を記入し、空いている棚にその品物を設置します。代わりにすでに棚に置かれている他の人の「Your Memory」の品物を持ち帰ることができます。
[期間] 2017年8月5日(土)～11月5日(日)随時(休館日を除く)
[会場] 金沢21世紀美術館「日々の生活」展示室11前

広報用画像

画像1〜12を広報用にご提供いたします。
ご希望の方は下記をお読みの上、広報室へお申し込みください。 Email: press@kanazawa21.jp

＜使用条件＞
※広報用画像の掲載には各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。
※一部トリミング不可の写真があります。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、
　レイアウトにご配慮ください。
※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報室へお送りください。
※アーカイヴのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。
以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願いいたします。

1

バアウ・モーウンスン《J39》
フレデリシア・ファニチャー、1947
Photo: Fredericia Furniture

2

ヤアアン・ガメルゴー《フォールディングスツール》
1970
© Jes Gammelgaard
Photo: Jes Gammelgaard

3

モーデン・ルーブナ・エスパスン
《ムーンジャー#1957》2016/17
© Morten Løbner Espersen
Photo: Ole Akhøj

4

イーレク・ムラ設計事務所
《パークフース》
ルイスポールセン、1984
Photo: Louis Poulsen

5

柳宗理《白磁土瓶》1956（復刻：1999）
イーレク・マウヌスン
《EM77バキューム・ジャグ》
ステルトン、1977
グラフィックデザイン：原研哉

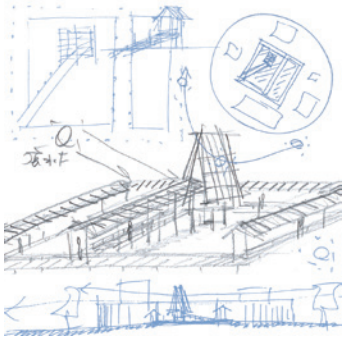
6

ルイーセ・カンベル
《ブルーエレメンツ》
ロイヤル コペンハーゲン、2011
© Royal Copenhagen
Photo: Royal Copenhagen

7

《茶筒》開化堂、1875
Photo: Kaikado

8



三分一博志《風、水、太陽の社》2017
金沢21世紀美術館インスタレーションのためのスケッチ
© Sambuichi Hiroshi

9

イサム・ノグチ
《あかり 1P》1973
株式会社オゼキ
Photo: OZEKI & Co., Ltd.

10

ベリカン・デザイン《ラボ・トライサイクル1》
ラボ、1979
© Rabo Tricycles A/S
Photo: Rabo Tricycles A/S

11

原研哉《畳座》飛騨産業株式会社、2009
Photo: HIDA

12

ラース・エングストラム《クリスチャニアバイクス・モデル・ライト》
クリスチャニアバイクス、1984
© Christiania Bikes
Photo: Christiania Bikes